

# ミステリ読書案内

2024. 2. 24 発行元

第554号 伊藤 剛

<https://mystery-dokuan.com>

## 昨年出た本の中から

『このミステリーがすごい!』の巻末ブックリストから未読の本をチェックして4冊読んだ。私がいつも注目している作家たちの作品。そう目立ちはしないけれども。併せて、能登半島地震の話の続きを少し…。

### 能登半島地震について思う

(第550号の続き) 今回の地震の被害を見ていると、能登半島地域の地形・地盤の特徴がよく現れている気がする。海岸線まで迫る崖と起伏の多い地形が、道路の被害に直結していると思う。

私が歩いた当時、トンネルができてはいたが、カーブの続く山道が多かった。地震で孤立集落が出るのは当然の事なのだろう。地質調査をする時、切り開いたばかりの崖に出ているフレッシュな地層(露頭)

は有難いのだが、災害には弱い事になってしまう。脆く崩れやすい岩石の性質も影響していると思う。

今回の地震の分析はこれから本格的になるだろうが、「押し力」による「逆断層」であり、北側の海岸線の隆起が特徴的である。「津波」が発生したもの十分に領ける変動幅である。実のところ津波による被害はまだ把握しきれていないのではないだろうか。

東日本大震災を経験した私には被害に合われた人達の動きが気にかかる。(以下、第556号に続く)

### 青柳碧人「クワトロ・フォルマッジ」

昨年2月に光文社から出た本。『ジャーロ』に連載された長編。青柳らしい仕掛けを期待したが、各登場人物から見た視点で同じ場面を四回繰り返すのはちょっと無駄が多いかな?と思った。

ピザの店「デリンコントロ」が舞台。店長が不在の日の夜、閉店間際に入ってきた男の客がピザを一口食べたところで死亡した。毒殺か? 店長代理を仰せつかった紅野仁志、ホール係のアルバイト八木沼映里、厨房に立つ宮田久美、ピザ担当の片山伸也の四人はそれぞれが抱える秘密が暴露しないようにと必死に動き回る。「クワトロ・フォルマッジ」とは四種類のチーズを使ったピザのこと。四人の特色を表現した題名。

### 三上延「百鬼園事件帖」

昨年9月にKADOKAWAから出た本。三上延は寡作な作家なので、こうして新しい作品に出会えることは有難い。昭和5年(1930年)から8年にかけての東京での出来事。関東大震災が起きてから8年後の様子がいきいきと描かれる。四つの話が納められた連作短編集の形式。

神楽坂。自分では影が薄い存在だと思っている大学生・甘木が「喫茶千鳥」でドイツ語教授の内田栄造と出会う場面からスタートする。この内田教授、授業が厳しく怖そうに見える人物なのだが…。なぜか甘木を気に入ったようで、同じテーブルに…。その後二人は背広を取り違えてしまって騒動に。この内田教授、実は内田百閒の名前で知られていて、夏目漱石、芥川龍之介との交流との話に展開していく。三上らしい文学の世界へ。

### 蒼月海里「戸張と御子柴」

昨年6月にKADOKAWAから出た本。蒼月海里にしては珍しく長編の構成で書かれた本。出だしに登場人物の作家・戸張が幻想小説からミステリーにジャンル替えする話が出てくるので、「これはミステリーにまともに挑戦するのかな」と期待させられたのだったが、やはり出来上がった物語は幻想小説系だった。自分の作品に行き詰まりを感じていた戸張が動画配信者の御子柴と出会い、根の島という孤島に取材に出掛ける流れになる。その島は「死者に会える島」として知られている。日帰りのつもりが島に閉じ込められてしまい、何人かで満月の夜を過ごさなければならぬ状況に追い込まれた。すると…。

### 秦建日子「Change the World」

昨年2月に河出書房新社から出た本。以前に出た『And so this is Xmas』の続編という内容。謎解きの要素は薄く、大都市で起きるテロ事件を題材にしたサスペンスもの。映画監督らしい映像化を考えた展開と言えるだろう。

本所南署に異動した刑事・世田が視点の中心に位置して描かれていることが多い。夏休み直前の錦糸公園で小学校教師の秋山玲子が殺されているが発見された。世田は型破りな女性刑事・天羽史とペアを組み思いつくままの捜査を展開する。その中でSNS上の爆破シュミレーション・アプリ「アイコ」の存在を知るようになる。気に入らない相手の情報を打ち込むと背景などがAIで作られて画面上で相手が爆破されるというもの。そして、小学校の担任している子どもの関連をたどってある飲食店店主の家を訪ねようとした時、突然家が爆発した。店主と子どもが爆死し、家庭教師に来ていた女性が重体に…。世田は離婚した妻の妹の子を預る状況に陥り、子ども絡みの展開になっていく。